第３回

トリエンナーレ

自由の女神 アート作文コンクール



受賞作品集

平成二十九年　三月十九日

テーマ：「『ありがとう』と言いたい」

ごあいさつ

ニューヨーク育英学園は海外の小さな一私学です。しかしその育英には大きな志があります。世界の中心地ニューヨークにある事を活かして、教育の最先端を担う本学園独自のプログラム・カリキュラムを発信するセンターになることです。そのひとつとして、学園創立三十周年であった七年前に、この「自由の女神アート作文コンクール」を始めました。世界中でけなげに頑張る、日本語で学ぶ子ども達。彼等の絵画と作文のコンクールです。七年前に他界されました日本画家で、東京藝術大学学長の平山郁夫先生を名誉審査委員長として、このコンクールはスタートしました。生前ご支援頂きました故平山先生の奥様、美知子先生が今回の名誉審査委員長として、去る十一月、十八年振りにご来園下さいました。子ども達はちょうど学園祭用の大屏風を描いている所でした。美知子先生から「これからも伸びのびと描いて、創造力を育んでいってください。」と、児童や職員に激励のお言葉をいただき、一同感激いたしました。

第一回トリエンナーレ展は「僕が私が大切に守りたいもの」、第二回「ぼくが、わたしが、うれしいとき」というテーマに続き、今回、第三回目のテーマは「『ありがとう』と言いたい」です。毎回、絵画も作文も、海外に住む子ども達ならではの伸びのびとした感性豊かな作品群を見ます。七百点の中から賞を決めるのは至難のわざでした。今回も、在ニューヨーク日本国総領事館様ならびに公益財団法人海外子女教育振興財団様にはご後援を賜ることができました。また、在ニューヨーク日本国総領事館広報センターギャラリー様とニューヨーク日系人会様には表彰式の会場・展示会場をご提供頂きました。合わせてここに厚く御礼申し上げます。

今後、このトリエンナーレ「自由の女神アート作文コンクール」は、三年ごとに大きく発展していくでしょう。世界を舞台に育つ子ども達の又となない発表の場となれば、こんなに嬉しいことはありません。

私共はこれからも、子ども達一人ひとりのニーズに合った教育機関として、子ども達により良い教育を提供できるよう邁進してまいります。

引き続き、皆様の温かいご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

二〇一七年三月吉日

ニューヨーク育英学園

学園長　岡本敏

～「作文部門」　目次～

平山郁夫大賞

「私の心に生きる祖父」　恩田　真弥（高二）・・・

作文部門グランプリ　平山郁夫大賞

My Grandfather Who's Living in My Heart, Maya Onda (11th grade)

ぐんま国際アカデミー高等部，日本

Gunma Kokusai Academy in Gunma Prefecture, Japan

ニューヨーク育英学園

私の心に生きる祖父

高二　恩田　真弥

八月、ギラギラと照りつける太陽のもと、負けじと泣いている蝉の声。待ちに待った夏休みというのに、祖父の思い出がよみがえっては切なくなる自分がいるのに気がつく。

一年前の八月四日、祖父は静かに息を引き取った。約三年前、がんという厄介なものにかかってしまい、ステージ三という宣告を受け、祖父は手術を余儀なくされた。その手術は成功し、退院後、不自由な部分はあるものの、またこれからも、今までと同じように祖父と旅行に行ったりして思い出作りができると、私は安堵した。

私の両親は共働きで、一歳の時から保育園に通っていた。両親が仕事で遅くなる時は、決まって、祖父母が迎えに来てくれた。祖父は寡黙な人だったが、いつも優しい目で私を見守ってくれた。一緒にいると安心感があり、心なしか温かさを感じた。時折、自転車の後ろに私を乗せ、電車を見せに連れていってくれたり、近所の公園まで一緒に散歩したりもした。

両親が仕事でいない休日は、日光までドライブし、お弁当を祖父母と一緒に食べたりした。幼いながらも、私は祖父母のお手伝いをしたいと思い、日光へ行ったときは、小さな背中に背負ったリュックの中に三人分のお弁当を入れて持ってあげたものだ。そこで三人で食べたおにぎりは、格別美味しく感じた。

ニューヨーク育英学園

祖母に教えてもらって私が作った少し不恰好なおにぎりも、祖父は美味しいと言って頬張った。

祖父は、いつも私を応援してくれて、私の頑張る姿に誰よりも喜んでくれた。そんな祖父の喜ぶ顔が見たくて、持久走でメダルをもらったり、ピアノのコンクールで賞をとったり、定期テストや通知表の結果が良かった時は、誰よりも先に祖父に報告し、見せに行った。たとえ、小さい賞であったとしても、受

賞した時は、
「まやは偉い。おじいちゃんの自慢の孫だ。」
と、すごく褒めてくれた。それが、私にとって頑張れる大きな励みとなり、また頑張ろうという気持ちを奮い立たせてくれた。
そんな祖父は、今はもういない。
忘れもしない、祖父が息を引き取る数日前、私は友人と遊びに行った時、祖父にお土産として買ってきたミッキーマウスの日本タオルを持って、会いに行った。病に伏していた祖父にとって、暑い日が続く、体にこたえる夏だった。私は、体温調節がきかなくなった祖父の額に、買ってきたミッキーの日本タオルを冷たい水で浸し、優しく置いてあげた。
「これはいい。最高だ」。
と、祖父は私の方を見て、にこにこ笑いながら言ってくれた。私が買ってきたタオルを大事そうに手にし、何度も触っては眺めていた。
私は、なぜか胸が熱くなり涙がこぼれそうになった。

そして、数日後、夜中の十二時、家の電話が鳴った。「おじいちゃんが危篤」という、祖母からの知らせだった。
私の両親は慌てて支度をし、祖父母の家へ行く準備をし始めた。両親は、私が祖父の最期を看取るのはあまりにもショックが大きいだろうと、家で留守番するように言ったが、私は祖父に会いたくていてもたってもいられず、両親と車に乗り込み、祖父のもとへ向かった。祖父に会うや否や、意識のない祖父に向かって、力を振り絞って、
「おじいちゃん」。
と叫び続けた。すると、その時、奇跡が起きた。それまで息苦しそうにして、目を開けることも、手に力を入れて握ることもできなかった祖父が、最後の力を振り絞り、その一瞬だけ私を見てくれたのだ。涙がとめどもなく出てきて止まらなかった。すぐには、祖父の突然の死を受け止めることができなかった。
私にとって、大切で、身近な存在であった祖

父は、ずっと傍にいてくれるような気がしたのだ。

私は、祖父からたくさんの事を学び、小さい頃から抱えきれないほどの愛情を注いでもらった。私のことをいつも応援し、私の頑張る姿に誰よりも喜んでくれた。そして、七くなる最後の最後まで、私のことを考えていてくれた。それなのに、私は祖父に一度も「ありがとう」と直接言うことができないまま、祖父はこの世を去ってしまった。私は、その事にとても悔いが残っている。なぜ、もっと祖父が元気な時に「ありがとう」と言えなかったのか。自分の傍にいつまでもいてくれると思っていたのだ。

今は亡き祖父であっても、私の心の中にはずっと生き続けている。祖父への「ありがとう」の気持ちを胸に抱き、これからも何事も精一杯頑張っていこうと思う。それが、天国で見守ってくれている祖父への、一番の感謝の気持ち、「ありがとう」を伝える方法なのだ。

蝉の声が響き渡る夏、1年前に亡くなった祖父との思い出に思いを馳せます。作品の前半では「まやは偉い。おじいちゃんの自慢の孫だ。」と言ってくれた祖父と過ごした日々を丁寧に綴ることで、私から祖父へそして祖父から私への温かい愛情のやり取りが伝わってきます。保育園に迎えに来てもらった幼少期から通知表をいち早く見せに行った思春期までの多々の出来事が温かく思い返されます。

作品の後半では祖父との最後の数日の苦しさが綴られています。苦しさの中でも優しい祖父と孫のやり取りが心に染み入ります。人の生きる糧とも言える無条件の愛と感謝の念に心が温かくなりました。

小学校低学年の部　金賞

Thank You, Mom, Sora Okada (1st grade)
Japanese Children's Society, NJ

ママありがとう

小一　おか田　空

ぼくは、ママにありがとういいたいです。

ぼくのママは、ぼくが生まれたときに、びょうきになりました。いまも、まい日くすりをのんでいます。

ニューヨーク育英学園

それでも、ときどきしんどいときがあります。それに、くすりのせいでふとりやすいです。

だけど、ぼくにまい日おべんとうをつくってくれます。また、ぼくがこまっているときは、「いつも、空のみかただよ。」といって、たすけてくれます。ぼくがかぜをひいたときは、ねないでおせわをしてくれます。

それなのに、ママにおこられたときや、いやなことがあってイライラしたときは、ママに、「でぶっちょ。」といってしまいます。でも、そんなときほんとうは、ママとギュウしたいとおもっています。

ぼくは、どんなときでも、いつもぼくのそばにいてくれるママのことが大すきです。ぼくをうんでくれてほんとうにありがとういいたいです。

ニューヨーク育英学園

ママの作者へ対する愛、作者のママへ対する愛が作品から溢れ出ていてとても素敵です。怒られた時、いらいらした時、ママへ悪口を言ってしまう作者の気持ちを、ママは分かってくれているはずだということが読み手にも伝わってきます。

Thank You, Cook, Rihito Kobayashi (2nd grade)
Glenwood Landing Elementary School, NY

ありがとう、クック
ふーこばやしりひと
おとといたかさきのおじいちゃんから、いぬのぬいぐるみがとどいたよ。おじいちゃんが、「おそらにいるクックにてがみをかくよ。だからおそらにいるクックにてがみをかくよ。」ってね。

ニューヨーク育英学園

ひさしぶりだね。ぼくが、あかちゃんのときにあったことがあるんだよね。クックは、おぼえているかな。ぼくは、いま七さいで、せが大きくなったよ。サッカーをがんばってるよ。それからね、いもうとのりさができたよ。いまニさいだよ。りさは、ぼくがママにおこられるとあたまをなでてくれるよ。サッカーもじょうずだよ。

ニューヨーク育英学園

いつも、おばあちゃんのそばにいてくれてありがとう。たかさきのおじいちゃんは、スカイプで、おばあちゃんやクックのおはなしをしてくれるよ。クックとおばあちゃんは、おそらでいっしょにおさんぽをしているんだよね。

たかさきのおじいちゃんは、ひとりですんでいてかわいそう。でも、スカイプしたり、ママがいつもぼくとりさのしゃしんをおくってくれているよ。

小学校低学年の部　銅賞

おじいちゃんも、にほんのおまつりのしゃしんをおくってくれるよ。どうがもおくってくれるよ。とってもおもしろくて、ぼくもりさもたのしみにしているんだよ。

おじいちゃんが、さみしくならないように、がんばるね。クックは、おばあちゃんがさみしくならないようにがんばって。

ニューヨーク育英学園

おそらにいるクック、いつもありがとう。これからもよろしくね。

りひとより

おじいちゃんから届いた、クックに似た犬のぬいぐるみ。亡くなってしまったクックへ話しかける形で、死んだおばあちゃんのこと、そして今、生きているぼくらの愛に満ちた暮らしが浮き彫りにされてきました。いつのまにか二つの世界がつながり、とても素敵な一つの作文となって、読み手を感動させます。

My Friend, Issey Tanaka (1st grade)
South Grove Elementary School, NY

ぼくのともだち

小一　田中　いっせい

四がつからアメリカのがっこうにはいりました。まだえいごがわからなかったときに、おなじクラスのカウエンがいっせいをてつだってくれました。まいにちあさがっこうにいくと、カウエンはいつもちかくにきて、「おはよう。」といってくれました。せんせいのいっていることがわからなかったときには、カウエンがどうやってやるのかみせてくれました。

ぼくはさいしょ、わからないことがたくさんあってきんちょうしたけれど、カウエンがとてもやさしかったので、がっこうにいくのがすこしずつたのしくなってきました。カウエンはとてもおもしろくて、ぼくをたくさんわらわせてくれました。そうやってあそんでいるうちに、えいごもすこしずつわかるようになっていきました。

たくさんおしえてくれたり、たすけてくれ

たカウエンにありがとういいたいです。こんどはぼくがあたらしくきたおともだちをたすけてあげようとおもいます。

ニューヨーク育英学園

アメリカの学校で出会った友だちカウエン君、そのやさしさに助けられていった作者。本当に友だちっていいものだということが伝わってきます。その友だちの環が、これからどんどん広がっていくことを願っています。

Meeting New Friends, Konatsu Oshima (3rd grade)
Fort Lee school No.3, NJ

新しいともだちとの出会い

小二　大しま　こなつ

夏休みに、日本の小学校にたいけんにゅう学をしました。はじめてのけいけんだったのでふあんでしたが、新しいおともだちがたすけてくれて、とてもたのしいけいけんができました。

はじめての学校の日、みんなわたしのことを見てたのではずかしく、みんなとなかよくなれるかふあんでした。

ニューヨーク育英学園

学校についてどうしたらよいかわからずにいると、たまたま近くにいた子が学校の中につれて行ってくれました。その子の名前は、まおちゃんといいます。

「だいじょうぶきんちょうしないで。」と言ってくれたので、こころづよくなりました。わたしは、まだはずかしくて「ありがとう」。と言うことができませんでした。

まおちゃんが、手紙をくれました。そのときには、なかよくなっていたので、

「ありがとう」。
と言うことができました。
もう一人新しいともだちができました。名前はかなちゃんといいます。休み時間になると、
「こなつちゃんもあそぶ」。
と聞いてくれました。いつもさそってくれて、いっしょにあそんでくれて、とてもたのしかったです。かなちゃんも手紙をくれました。わたしは手紙をわたして、

ニューヨーク育英学園

「ありがとう」。
とつたえることができました。
はじめはふあんでしたが、みんながこえをかけてくれたので、おともだちがたくさんできて、なかよくすることができました。
おともだちに
「ありがとう」。
と言ったら
「どういたしまして」。
とかえってきました。おともだちにかんしゃの気もちをつたえられてよかったなと思います。
「ありがとう」。
と言ったら、あい手もじ分もいい気もちになります。
「ありがとう」ということばは、すてきだなと思いました。
これからは、こまっている人がいたら、たすけたいと思います。また、たすけてもらったら、きちんとありがとうと言いたいと思います。

ニューヨーク育英学園

日本で体験入学した学校での出会いが、会話によって、友達の声となって読み手に聞えてき、生き生きと伝わってきます。友達からもらったやさしさを、さらに自分の周りの人へと広げていってほしいと思います。

Miracle of Life, Rion Nakajima (4th grade)
Japanische Internationale Schule zu Berlin e. V., Germany

小学校中学年の部　金賞

奇せきの命

小四　中島　凛音
ニューヨーク育英学園

私は、ひいおじいちゃん（広島のおばあちゃんのお父さん）に会ったことがありません。ひいおじいちゃんは、私がお母さんのおなかの中にいる時に亡くなってしまったそうです。でも、ひいおじいちゃんの奇せきの話を何度も聞いたことがあります。それはこんな話です。

一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が落とされた日、ひいおじいちゃんは広島にいました。そして、原爆が落とされた午前八時十五分、いつもなら、ちょうどばく心地近くの陸軍病院で働いていたはずでした。もし、ばく心地近くにいたなら、ひいおじいちゃんはその場で死んでしまっていたことでしょう。でもその日、ひいおじいちゃんと一緒に住んでいた人が急におなかをこわして、ひいおじいちゃんはその人のために薬をもらいに行ったのです。それで家を出るのがおそくなり、原爆が落とされた時、ばく心地より少しはなれた広島駅近くの「えんこう橋」の橋の上にいました。電車の中にいたせいか、ひいおじいちゃんの命は助かり、メガネや時計が割れたくらいですんだそうです。

ひいおじいちゃんが生き延びたからおばあちゃんが生まれて、おばあちゃんがいたからお母さんが生まれて、お母さんがいたから凛音ちゃんが生まれたんだよ。」と広島のおばあちゃんが教えてくれました。

私は、ひいおじいちゃんが生き延びてくれてよかったと思いました。もし、ひいおじいちゃんがとくなっていたら、私は地球上に存在しなかったのです。私は、ひいおじいちゃんが生き延びたことも、私が生まれたことも、どちらも奇せきだなあと思いました。

今、私の住んでいるドイツでは、テロ事件やじゅう乱射事件が起きています。このようなおそろしい事件を起こす人は、なんの罪もない人々を殺し、しかも自分で自分を殺して

小学校中学年の部　銀賞



しまいます。なぜそんなことができるのでしょうか。私は、命の大切さを知らないからだと思います。世界中の人々は、だれもが奇せきによって地球上に生まれています。そのかけがえのない、奇せきの命をうばってはいけないのに……。

私は、限界まで精いっぱい生きようと思います。だって、大切な大切な、一度しかない命なのだから。

最後に、天国にいるひいおじいちゃん、命の大切さを教えてくれて、本当にありがとう。

ニューヨーク育英学園

広島に落とされた原子爆弾の被害を奇跡的に免れたひいおじいちゃん。その話を何度もおばあちゃんから聞いて、自分の存在の尊さ、すべての命の奇跡を感じることのできる作者の繊細な感受性と、思慮深さが表れた、素晴らしい作品です。読み手にも、人生を精いっぱい頑張ろうというメッセージが素直に伝わります。

Dear Grampa, Luna Sugahara (3rd grade)
Fort Lee school No.3, NJ



おじいちゃんへ

小三　菅原ルナ

今年の夏、京都のおじいちゃんが病気になりました。病気だとわかったのは、私達が京都に帰る直前でした。胃ガンです。でも、私達が京都にいる間、色んなことをしてくれました。

日本には、妹と二人でひ行きにの。て帰りました。おじいちゃんは、京都から成田空港までむかえに来てくれました。その後、ホテルにとまって京都に帰りました。京都に帰ったら、私がず。と行きたか。たスーパー銭湯につれてい。てくれました。色んな種類のおふろがあ。てすごくきもちよくて、それに楽しか。たです。そこでごはんも食べてすごくおいしか。たです。

つぎの日から、小学校に行きました。行くときは、おばあちゃんに車でつれて行。てもら。ていましたが、帰るときは、おじいちゃんがよくむかえに来てくれていました。家で

ニューヨーク育英学園

は、本を読んでくれたりべんきょうをおしえてくれました。学校が休みの日には、サーカスやコンサートにつれていってくれました。サーカスで私がすごいと思ったのは、二人の男の人が、細長いぼうの上で、おちずにとびまわっていたからです。おじいちゃんは、サーカスの間ずっとねていました。きっと、つかれていたのだと思います。ほかにも、アナ雪のスケートショーにもつれて行ってくれました。アナ雪のショーを見ている間も、サーカスにいたときみたいにずっとねていました。

ニューヨーク育英学園

やっぱり病気のせいでつかれていたのかもしれません。

それでも、広島や和歌山にもつれていってくれました。広島では大久野島と言ううさぎの島で遊びました。そのときはおじいちゃんも楽しそうに遊びました。その後、次の日に宮島に行きました。宮島には、シカがかわいいと思いましたが、おじいちゃんとおばあちゃんは、ちょっとこわかったみたいです。なぜなら、おじいちゃんがもっていた紙ぶくろをムシゃムシゃ食べていたからです。でも、おじいちゃんは楽しそうでした。和歌山では、白浜の海でおじいちゃんとたくさん泳ぎました。おじいちゃんの せなかにのると、おじいちゃんは私の足がつかないところまで行きました。私は、足がつかないところでおりて、お父さんのところまで泳いで行きました。おじいちゃんも気持ちよさそうに泳いでいました。

ニューヨーク育英学園

おじいちゃんは、明日、手術をします。その手術は、胃を切る手術です。胃を切るとおなかが小さくなって、あんまりたくさん食べられなくなります。おなかもいたくて、しばらくはあまり遊べません。だから、おじいちゃんは手術の前にたくさん遊んでくれました。

おじいちゃんありがとう。

明日、手術がんばってね。

胃がんを患ったおじいちゃん。それでも夏休みに一時帰国をした時には、孫たちのために精一杯頑張ってくれた様子が、細かく丁寧に書かれています。おじいちゃんのおかげで、楽しい思い出をたくさん作ることができた感謝の気持ちと、おじいちゃんを気遣う作者の優しさが伝わる作品です。

小学校中学年の部　銅賞

Thank You, Keita Horiko (4th grade)
Collegiate School, NY



ありがとう

小三　ほりこ　けいた

ありがとうと言う言葉は、とてもふ思ぎな言葉です。聞いただけで温かい気持ちになるし、すごく大へんなことをしてあげてもちよっと気分が悪くなっていても、やってあげてよかったなぁって思ってしまいます。

ぼくはアメリカに住んでいるので、サンキューと言うのがふつうです。でも、アメリカのサンキューよりも、やっぱりありがとうの方がぼくには特別に聞こえます。

アメリカ人はサンキューと言うのが上手です。メールでも、最後にサンキューと書くのがふつうだし、先生が、ぼくたちに何かたのむ時でも、まだやっていないのにサンキューと言ってたのまれます。

もちろん、そう言われたら、やらないとけないと思ってがんばってしまうけれど、そのサンキューはやっぱり、終わった時に言ってもらうありがとうとは、ちよっとちがうと

ニューヨーク育英学園



思います。それは、その人のためのありがとうです。

だからぼくは日本のありがとうが大好きです。日本のありがとうはかんたんに聞けません。

リオのオリンピックの閉会式で、次のオリンピックをする日本が最初に、しん災の時に世界が助けてくれたので、ありがとうと言う文字を日の丸の中に見せた時、温かい気持ちになりました。いろんなことをしてもらって、もっと早く言いたかったし、おそかったけれど心のそこからのありがとうだったと思います。

ぼくのお兄ちゃんは、ぼくに一回もちゃんとありがとうと言ってくれません。お兄ちゃんは、あまり話さないし、いつも頭をふるだけです。でもそんなお兄ちゃんが、日本語で言うありがとうは、きっと、ぼくが感動するありがとうだと思います。いつかは、お兄ちゃんの「ありがとう」を聞きたいです。

ニューヨーク育英学園

英語の「サンキュー」と日本語の「ありがとう」では、その使われ方や意味が微妙に違うことを、アメリカ生活の中で気づき、作者なりに考察した視点が素晴らしい作品です。「ありがとう」という言葉のもつ独特の意味やよさを、改めて感じさせてくれます。

小学校高学年の部　金賞

Speech, Julien Ishigahara (5th grade)
Japanese Children's Society, NJ

スピーチ

小五　石ヶ原　ジュリアン

「ピューパチパチパチパチ」

初めて感じたこの気持ち。きんちょうして足がふるえていた。「平和の鐘」出版記念会で、ぼくは、ろう読する機会をあたえられた。ぼくは、運動会で放送をした事があり、英語も話せるので選ばれたのだ。

「こんなチャンスはめったにない。これは、大切にしっかりやらなければいけない。」

ニューヨーク育英学園

そう思った。

ろう読は、英語で難しくなかったが、はずかしくなった。いつもなら大じょう夫だった。けれども、今回は国連の書店で、たくさんの人が見に来ていた。きんちょうしながらも勇気がわき始めた。この日のために、ぼくは一生けん命練習してきた。お母さんは、

「日本の鐘は、そんな音しないよ。」

「鐘の音の前後はちゃんと間をあけてごらん。そうすると、みんながアレッと思って注目して聞いてくれるよ。」

ぼくは、たくさんの事を学んだ。そして、気もちをこめて一つ一つ言葉を読んだ。前日の木曜日、急に変更があり、ぼくが最後のページを読むことになった。

ぼくは、この夏、広島の小学校で平和学習を受け、戦争のこわさや残こくさを知ったので、このろう読の機会に感しゃを述べたかった。

ろう読が終わり、本が閉じられた時、ぼくはその時が来たと思った。ぼくは、スタッフの人に英語で

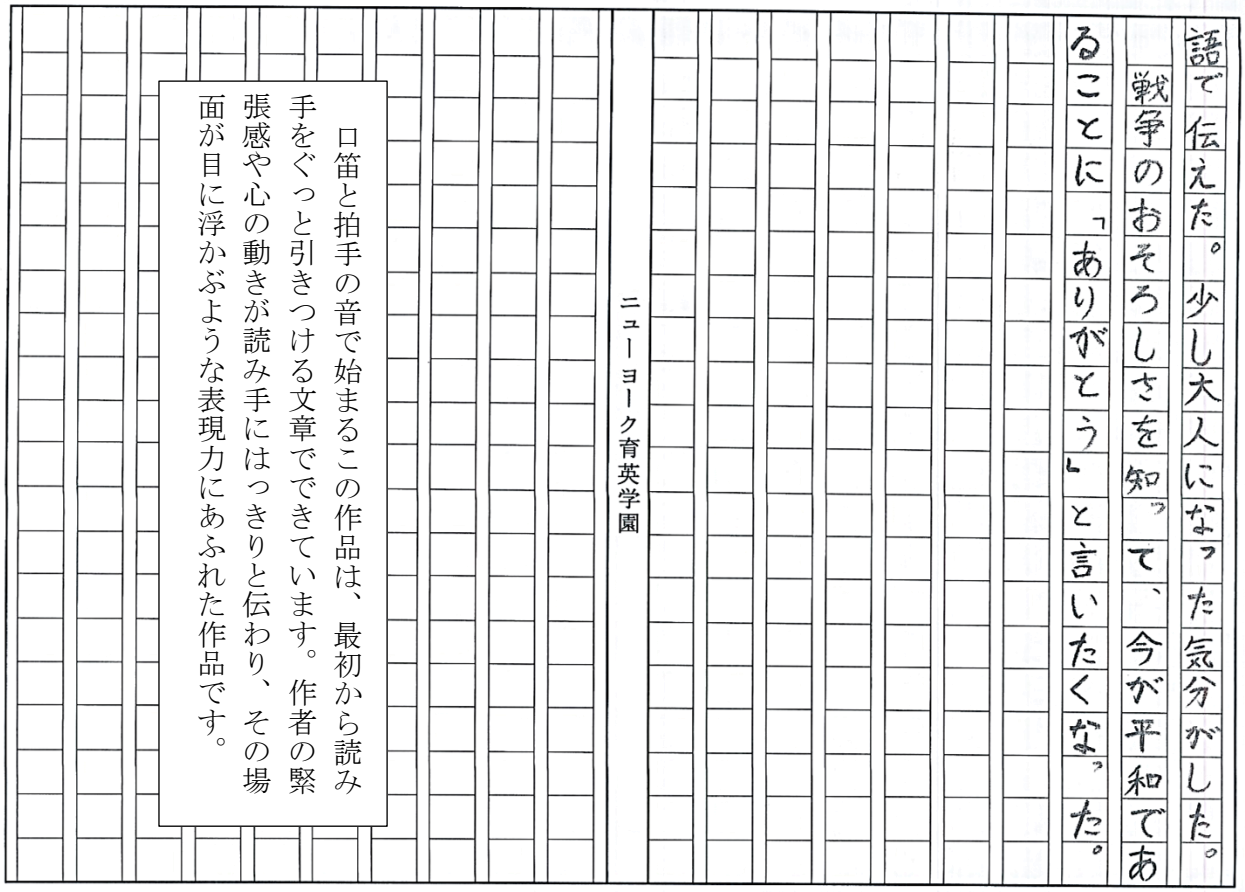
「一言みんなに言っていいですか。」

と聞いた。会場はまだ、しんとしていた。

「今年の夏、ぼくは広島に行きました。そこでぼくは、第二次世界大戦や原子ばくだんについて学びました。そして、この本でも」と戦争のことを知り、みんなの前でこの本を読むことができて光栄です。」

ニューヨーク育英学園

ぼくは、どうしても言いたかったことを英



語で伝えた。少し大人になった気分がした。
戦争のおそろしさを知って、今が平和であることに「ありがとう」と言いたくなった。

ニューヨーク育英学園

口笛と拍手の音で始まるこの作品は、最初から読み手をぐっと引きつける文章でできています。作者の緊張感や心の動きが読み手にはっきりと伝わり、その場面が目に浮かぶような表現力にあふれた作品です。

小学校高学年の部　銀賞

Thank You, Ryuki, Yuika Nakahara (6th grade)
Carrie Palmer Weber Middle School, NY



ありがとう、りゅうき
小五　中原　唯華

「ゆいか、早く遊ぼうよ。なんで遊んでくれないの。」
と、弟のりゅうきが言った。
「今は無理。もう少しで終わるから。」
私は言った。いつもりゅうきは、私が宿題をしている時にじゃまをする。
「少しだけだから。お願い。」
と、りゅうきはもう一度たずねてきた。

ニューヨーク育英学園

「しょうがないな。」
と私はつぶやいて、やっていたドリルをパタンと閉じた。それから、部屋の電気を消して、外へ向かった。
弟と外に出て、十五分だけだと約束した。それでも、すごく喜んでくれた。庭でバドミントンをして、たくさん楽しんだ。宿題をしていた時は、すごくつかれていた。けれど、今はもう元気だ。弟に遊ぼうとさそわれて良かったのかもしれない。十五分は、あっとい

う間に過ぎ去った。

自分の部屋に戻り、机の上に置いてあるドリルを見て、私はなぜか、がんばろうという気持ちになった。いすにすわって一生けん命問題を解くと、すぐに終わった。魔法みたいだった。きっと、一緒に遊んでくれた弟のおかげで、ストレスが吹き飛んだのだろう。私は、「ありがとう、りゅうき」と心の中でつぶやいた。この時、私は初めて気付いたのだ。いつもりゅうきに「ありがとう」と言っていなかったことに。

ニューヨーク育英学園

よく考えてみると、りゅうきは、いつも色々な事をして私を楽しませてくれる。いつも面白いことをして私を笑わせてくれる。もちろん、けんかをしたり、きらいになる時もある。けれど、これも仲が良いということだ。弟がいなければ、私は毎日笑顔で過ごせないかもしれない。たまにはりゅうきに「ありがとう」と言ってみようと思う。

私をいつも幸せな気持ちにしてくれるりゅうき、本当にありがとう。

ニューヨーク育英学園

普段は邪魔ばかりする弟が、実は作者の疲れを吹き飛ばすくらい大切な存在だったことを改めて思い知らされるという、愛情にあふれた作品です。いつもは伝えていない感謝を弟に伝えたいという素直な気持ちが光る作品です。

Thank You to America, Kyoka Nishiwaki (6th grade)
Carrie Palmer Weber Middle School, NY

アメリカにありがとう

小六　西脇　京花

「やだなぁ、行きたくないなぁ」現地校の初日でそう思っている私を昨日のように覚えている。

私は父の仕事の都合でアメリカで三年半過ごし、かけがえのない経験をしてきた。三々月後の一月に日本に本帰国することになった。大変だった時期はいつも「早く日本に帰りたい」と思っていたが、いざ帰ると決まるとだんだんと悲しくなってきてしまった。

私は最初の一々月ぐらいは友達があまりいなかったり、自分が言いたいことが通じないことなどで、ストレスがたまり、学校に行きたくなかった。学校前はお腹が痛くなったり母には毎朝、「行きたくない。」と弱音やグチを言っていた。アメリカ人に自分のお弁当を見て、「ewww」（気持ち悪い）

ニューヨーク育英学園

と言われ、慣れるまで母にお願いしてサンドイッチを用意してもらい、それを食べていたのを今でも覚えている。

こんな嫌なこともあったが、その後訪れた日々はその何倍も最高だった。英語が話せるようになってアメリカ人の友達とコミュニケーションを取れるようになったり、とても優しい先生たちに受け持っていただいたり、色々な国から来ている人たちと友達になれたりした。この他にもたくさんある。一生忘れない経験をさせてくれたアメリカに、ありがとうを言いたい。

まず、アメリカで出会った友達にありがとうを言いたい。なぜなら、英語が全く話せなかったときでも優しくしてきてくれたからだ。英語を話している時、言い方や、使い方が間違えている時はいつも教えてくれた。友達のおかげで英語がたくさん話せるようになったのだ。

次に、アメリカの担任の先生にありがとう

ニューヨーク育英学園

小学校高学年の部　銅賞

Thank You to My Books, Kanae Funabiki (6th grade)
United Nations International School, NY



ありがとう本

小六　船引　杏苗

私は小さな頃から、本が大好きでした。本を読んでいると、わくわくします。小さな頃は、お母さんかお父さんが毎晩寝る前に、本を読んでくれました。その時から私は、本が大好きだ、たそうです。私が今でも覚えている本は、「ねずみくんのチョッキ」や、「バムとケロ」のシリーズです。バムとケロシリーズは、全巻持っていて、今もおもしろくていい本だと思います。

ニューヨーク育英学園

私は、本を読んでいる間に、違う世界へおとずれます。その「違う世界」というものの中には、夢のような楽しい世界や、悪夢のような悲しい世界もあります。とても感動的な本を読むと、時には泣くこともあります。

私は、五才くらいから一人で本を読み始めていたと思います。その時は、簡単な英語や日本語の本を、読んでいました。

最も思い出深い本は七才になってから読ん

言葉の違う国へ来た時の戸惑いやためらいの気持ちが、細かく表現されています。そんな中で作者を励まし、支えてくれた人たちへの感謝、そして自分も頑張ろうという前向きな気持ちが強く読み手に伝わってきます。



を言いたい。この三年間、私は先生に恵まれてきた。三年ずっと、いやだと思った先生は一人もいなかった。三人とも私のことをたくさん考えてくれて、一人の人間として尊重してくれた。とても感謝している。私の三、四五年生の先生は、私が英語をあまり話せないことを知っていて、宿題を簡単にしてくれたり、楽しく学べるよう工夫しながら様々な教科を教えてくれた。日本では経験できなかったオーケストラも経験できたことは大きかった。友達に負けないよう頑張って練習し、コンサートマスターになれたことは、大切な思い出だ。この7メリカでの先生方との出会いによって私は将来先生になる夢ができた。

ニューヨーク育英学園

三年半のアメリカ生活は忘れられない貴重な日々だったと思う。英語を保持できる学校に行けるように頑張っている。でも受験だけではなく、ここアメリカでしかできない事をもっと経験し思い切り楽しみたいと思う。私を成長させてくれたアメリカに心から「ありがとう」を言いたい。

ニューヨーク育英学園

だ、ハリーポッターです。ハリーポッターを読んで、初めて本というものはとても美しくて楽しくて、またワクワクしたりドキドキするものだということを知りました。

ハリーポッターは、ま法の世界での話です。七回以上読みました。何度読んでもおもしろく、読む度に新しい発見があります。例えば、二回目に読む時には、犯人が分かっていますが、その犯人が明らかになる前にどのようにその感情の動きや行動を作者が描写しているのか細かく読み取ることができました。九まではハリーポッターの世界は、まるで作者が見たかのようにあまりにも本格的に、細かく描写されていたので、密かに本当にある世界だと信じてしまうほどでした。

今年、日本のいらすに行って、ハリーポッターの乗り物に乗りました。暑い中、二時間以上も列に並びましたが、ハリーポッターの世界がよく再現されているなと思いました。

ハリーポッターは、今でも大好きで、私の最も心に残る本で、宝物でもあります。

本は、私が落ち込んでいる時や、悲しんでいるときに現われる、助け船です。ひまな時も、本を読み始めるだけで特別な時間になります。寝る時間になると、トイレにかくれて、自分と本だけの時を過ごすこともありました。本を読んでいると、気持ちを盛り上げてくれたり、落ち着かせてくれたりします。

本には、ま法のような力があると感じます。今の私は、楽しいところや悲しいところ、色々な場面が混ざっている本が大好きです。これからもどのような本に出会えるのか、とても楽しみです。本と過ごす時間に感謝して。

ありがとう。

ニューヨーク育英学園

本が大好きな人なら誰でも経験したことがある気持ちを、細やかに表現しています。面白くて七回以上も読んだ本、寝る時間なのにもっと読みたくてトイレに隠れて読んだ本。本からもきっと「たくさん読んでくれてありがとう」という言葉が返って来るでしょう。

What Does It Mean to Live, Yuta Kasai (10th grade)
The Bronx High School of Science, NY

生きるとは何か？

笠井　勇汰

僕は時々「生きるとは何か？」と思うことがある。日常を振り返ってみても、朝起きて学校に行き、そして家に帰ってタご飯の後は勉強。僕は、このように過ぎる日々のサイクルを思い返すたびに、日常の「つまらなさ」をよく実感する。

そんなことを考えながらある日、僕は現地校の高校受験のための塾に通っていた。アメリカ最大のグランドセントラル駅の7番線プラットフォームにある小さな売店に立ち寄った。のどが渇いていたので何の缶ジュースを買おうかと迷いながら、目の前に見える冷蔵庫とその中のジュースを見つめていた。グレープフルーツダ、あるいはコーラ。そんなことを考えながら僕はもじもじしていた。その時だった。はっと驚き、そして気が付いた時には、インド人らしい店の店員が僕の肩に手をかけていた。正直、その店員の顔は、とても深刻そうに悩んでいるように見えた。もしかして「早く選べ！」と思われているのかと考えながら、店員から目をそらし、もう一度前に見える缶ジュースを見ながら、「じゃあグレープフルーツダにしよう」と決断した時だった。店員の悩んでいた顔が急に笑顔になった。僕は一瞬何が起こったのかわからなかった。そして、よくわからないまま冷蔵庫からグレープフルーツダを取り出し、店員に代金を渡そうとした時、店員はまた笑みを浮かべると、「それが欲しかったのか」と言いながら、代金を渡そうとする僕を止める。少しまた戸惑っていたらしいが、覚悟を決めたのか僕は向かって聞いてきた、「君は勉強をしに行くのかい？」と。僕は不思議そうにその質問に答えると、店員は「そうか、じゃあ君は勉強を頑張っているからご褒美だ」と言い、僕が渡したグレープフルーツダをまた僕に渡してくれた。店員の目は真剣だった。そして店員は思いがけず僕にこう言った。「お前は、医者か建築家になれ

れ、そして世界のリーダーになれ！」と。

ちょうどそのとき電車が到着した。僕は店員に「有難うございました」と頭を下げ、急いで電車に乗った。電車の窓からは店員のおじさんがカウンターに戻るのが見える。僕は心が感謝の気持ちでいっぱいになるのを感じた。正直に言うと、その店の暮らし向きは楽には見えなかっただ。だから、缶ジュース一本の重みがいかにあるかということをすごく実感した。

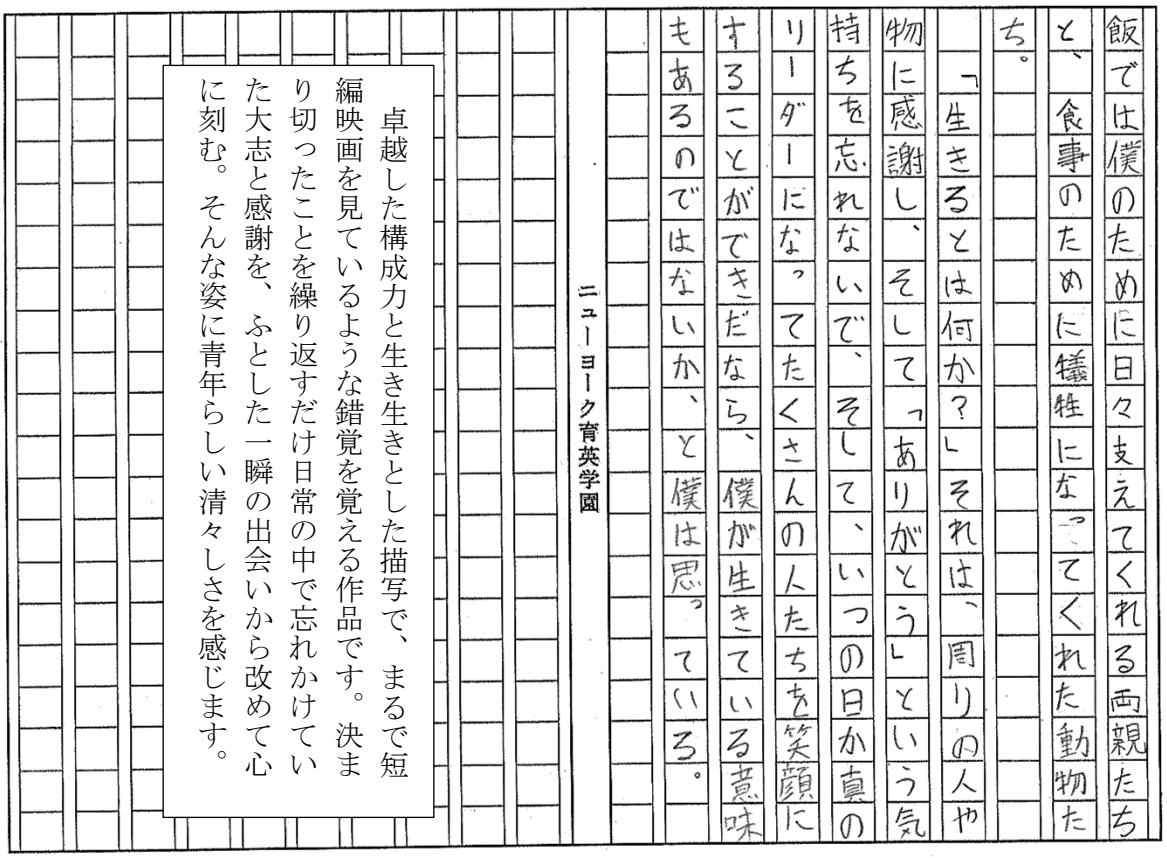
ニューヨーク育英学園

その日の塾の帰り、僕は非常に疲れていて電車の窓を呆然と見つめながら、今朝出会った店員のことを考えていた。店員が最後僕にかけてくれた言葉「世界のリーダーになれ！」がまだ頭と心に焼き付いていた。ふとその時、僕は思った。「あの人の言葉はもしかしたらたくさんの人たちを代表して僕に大切なメッセージを伝えてくれたのかもしれない。今、この社会の中には一生懸命に毎日働いても、世界中にお金が不十分な人はたくさんいる。又は働きたくても仕事すらない人たちもいるだろう。そして、彼らは本当の自由というものを今だ得られていないのではないか。その多くの人々の夢と希望を叶えるためにも真の世界のリーダー的存在になって欲しいという希望だったのかもしれない」と。そんなことを考えながら僕はある結論にたどり着いた。一つ目は、この世界には給料の良さや悪さは関係なく僕たち一人一人のために生きがいを持って働いてくれている人たちがいるのだということ。二つ目は、その人たちの多くの助けがなければ僕たちが生きていけないこと。

ニューヨーク育英学園

僕は時々「生きるとは何か？」と思うことがあった。日常を振り返ってみたら、朝起きて学校に行き、そして家に帰ってタご飯の後は勉強。でも、その当たり前と思っていたプロセスの一つ一つの間に、実は、僕は色々な人に助けられて生活ができているのだ。学校に行くための電車を運転してくれる人。学校で勉強を教えてくれる先生たち。そしてタご

中学・高校の部　金賞



飯では僕のために日々支えてくれる両親たちと、食事のために犠牲になってくれた動物たち。

「生きる」とは何か？」それは、周りの人や物に感謝し、そして「ありがとう」という気持ちを忘れないで、そして、いつの日か真のリーダーになってたくさんの人たちを笑顔にすることができたなら、僕が生きている意味もあるのではないか、と僕は思っている。

ニューヨーク育英学園

卓越した構成力と生き生きとした描写で、まるで短編映画を見ているような錯覚を覚える作品です。決まり切ったことを繰り返すだけ日常の中で忘れかけていた大志と感謝を、ふとした一瞬の出会いから改めて心に刻む。そんな姿に青年らしい清々しさを感じます。

The Shoeshine Boy, Nozomu Okamoto (7th grade)
Cresskill Middle School, NJ



靴磨きの少年

中一　岡本　希望

今年の夏、僕は中米の国グアテマラに出かけた。僕にとって初めての発展途上国上陸だった。アンティグアという町で、午前中は現地のスペイン語学校に行き、午後はスペイン語学校の宿題と少しの町歩き、週末は郊外に足を延ばすという滞在型の二週間を過ごしこの旅で一番考えさせられたのは「違い」ということだ。アメリカとグアテマラでは物価が五倍以上も違う。きちんとした、景色の良いレストランで食事をしても一人約二十ケツァール（五ドルくらい）の値段だった。アメリカのファストフード並の値段で美味しいものが食べられ、すごくお得感があった。僕は、自分がここではお金持ちになった気がして、最初の数日はアンティグアライフを満喫していた。けれども、段々それが申し訳なく思えてきた。見るからにフェアトレードが行われていない店や、いわゆるスラム（危険、汚

ニューヨーク育英学園

い、キツイ）の仕事を安い給料でしなければならない現地の人達の粗末な暮らしぶり、その裏で明らかに得をしたり儲けたりしている人達がいる、そんなことに徐々に気付き始めたからだ。このような格差があることを聞いたり学んだりしてはいたが、発展途上国のグアテマラで僕は初めてそれを目の当たりにし、愕然とした。

中でも印象に残っているのは、靴磨きをしていた五、六歳の少年だ。その少年はシャワーを浴びたことがないようなボサボサの髪に、穴や切れ目だらけの服を着、底が擦り減ってサンダルみたいになったスニーカーを履いていた。少年はパルケ・セントラル（中央公園）や道端で大人相手に呼び込みから接客までを一人でこなしていた。観光客から避けられ、周りから汚らわしく見られているようで、とても可哀想に感じた。しばらくして、現地のサラリーマン風の男性が立ち止まり、少年に靴磨きを頼んだ。現地の人が働く子どものお

客となっていて、こうしてここの経済がうまく回っているのかもしれない。けれどもこうして昼間働かなければならないとなると、子どもは学校に行くことができないのではないか、そう思いながら僕はその様子をじっと見ていた。少年は持っていた黒い箱を開け、ブラシを取り出し、箱をまた閉じ、足台としてお客の前に素早く差し出した。お客が慣れた様子でその台に足を置くと、少年はサッと腰にあったタオルを取り出して靴の表面を拭き、またブラシで靴紐の部分を払い、靴墨を使って靴磨きを始めた。手際よく進めていくその様はプロの仕事ぶりだった。その間男性は新聞を読んだり携帯をいじったりしている。靴磨きが終わり、男性からお金を受け取った少年は、どこか誇らしげに見えた。僕よりもずっと幼いにも関わらず、自分で仕事をしてお金を稼ぐ姿は、年齢よりもずっと大きく感じた。それに比べて僕は、自分で働いたこともないのにこうして外国へ旅行に来て、観光ま

できている。その間この少年は汗水垂らして働いている。僕は、その少年と僕との間に歴然とした「違い」の存在を感じた。一体この違いは何なのだろうか。どこから来るのだろうか。僕は、観光客としてその少年と同じ空間に居ることが居たたまれなくなった。

僕と靴磨きの少年との違いはどこから来るのか。あの日以来ずっと考えている問いだ。初めは言語、文化、人種、社会など、違いはたくさんあるように思えたが、考えれば考えるほど僕とあの少年との間には、それほど大きな違いはないのではないか、そう思えてきた。僕とあの少年との違い、それは「生まれた地」それだけだった。アメリカに生まれた子とグアテマラに生まれた子、たったそれだけだ。けれども、その違いは単純なようで大きいのかもしれない。たったそれだけの違いで生活、環境、教育、未来にここまで影響が及んでいる。

どうすればその「差」を超え、お互いが一

ニューヨーク育英学園

緒にいて気持ちの良い関係になれるだろう。僕が再びアンティグアを訪れても肩身の狭い思いを抱かなくてもいいような、あの少年がアメリカに来ても居心地のいいような、そんな世界になっていくには、何かが変わらなければならないと思う。では一体何を変えていけばいいのだろう。何から手をつければ良いのだろう。生まれた地による違いが、「差」ではなく「個性」になっていけば良い。僕はそのために何ができるだろう。僕の問いかけはまだ始まったばかりだ。僕はこの問いかけをくれたグアテマラ体験に感謝しながら、その問いに対する答えに近づけるよう、目を大きく見開いて、敏感になって進んでいきたいと思う。

ニューヨーク育英学園

旅先で出会った靴磨きの少年と自分との間にある「違い」に気づき、その「差」に思いを巡らす作者。どちらが幸せか不幸かではなく、その差がそれぞれの「個性」になっていけば良いという考えは今後この世界の将来を明るく照らしていくであろうと感じました。

A Girl in Antigua, Makoto Okamoto (11th grade)
Cresskill High School, NJ

アンティグアの少女

高二　岡本　真実

この夏、僕は家族と共に、グアテマラの古都アンティグアを訪れた。目的はスペイン語を上達させるためだった。しかし、その目的をよそに、この世界遺産の街でのある些細な光景が、僕の考えを根本から一変させた。

街の散策していたある日の午後、急な雨に降られ、中央公園を取り囲む回廊に駆け込んだ。不意の雨宿りで急に手持ち無沙汰になった僕は、行き交う人たちを観察し始めたが、横にいた妹は、観光客の髪にグアテマラの民族織物を模した編み込みをしてくれるインディオの親子を目ざとく見つけ、たどたどしいスペイン語で値段交渉を始めた。交渉がまとまったらしく、今度は編み込んでもらう糸の色選び。その横で僕の目は、編み込みをしてくれるおばさんの隣にいた幼い少女の上に止まった。十歳にも満たないだろう少女の浅黒い肌は、どことなく僕ら日本人に似ていて親

ニューヨーク育英学園

しみを覚える。仕事をする母親のそばで、赤ちゃんをあやしている少女もまた、家族の一員として立派に働いているのだ。民族模様が織り込まれた大きな布をたすきがけにして、赤ちゃんを包み込んでおぶっている。赤ちゃんがぐずり出すと、少女は立ち上がってあやす。なかなか泣き止まない。すると泣きじゃくる赤ちゃんをなだめながら、歩き出す。しばらくして戻ってくると、黙って母親の脇の石畳に座り込む。赤ちゃんはすやすや眠っている。少女は、母親が作業する手元をじっと静かに見つめている。髪と糸とを交互に取り、編み込んでいく作業は、小気味良いリズムが楽しく、見ていても何か心地良い。少女はどういう思いでそれを見つめているのだろう。仕事を覚えようとしているのか。あるいは、もう既にその技術を持っていて、自分もしたいと思っているのか。少女の母親は、他人の髪を飾る商いをしているが、後ろ一つに束ねられた少女の黒い髪はけばけばしていて、お

ニューヨーク育英学園

世辞にもきれいとは言い難い。そのまま石畳に座るので汚れてしまうのであろう服も、靴も、擦り切れてかなりボロボロで、経済的に貧しい家庭であることは一目瞭然だ。同じ年代の子ども達がアイスやジュースを片手に少女の側を歩いて行く。ヨーロッパ系ゲアテマラ人の白人の子ども達が、下校時間を迎えているのだ。制服を着て友達と楽しそうに話している同年代の女の子たちを見て、少女は何を思うのだろう。少女は学校に行ったことがあるのだろうか。勉強がしたいと思ってはいないのだろうか。制服に憧れを持っているのだろうか。本当は観光客相手の髪結い以外の仕事をしたいのだろうか。そもそも、彼女はそれ以外の選択肢が世の中に溢れるほどあるということを知っているのだろうか。なりたい自分になるための手段は与えられているのか。観光客の日本人、制服の白人、石畳に座る少女。気が付くとそうだった。同じ時間、同じ空間に、こうも違う環境に生まれた同じ

ニューヨーク育英学園

世代が交差する。僕は何とも表現しようのない奇妙な感覚に襲われた。突如、静寂を破って赤ちゃんが再びぐずり出す。母親が髪を編む手を休めることなく少女に目配せを送ると、少女はまた立ち上がってあやしに出かけて行った。そんな自分の姿を唯々見つめ、あれこれ思いを巡らせている僕の存在に気が付いたのか、少女はふと振り返る。くりくりした黒い瞳の笑顔だった。

その笑顔を見た時、急に僕はどぎまぎした。

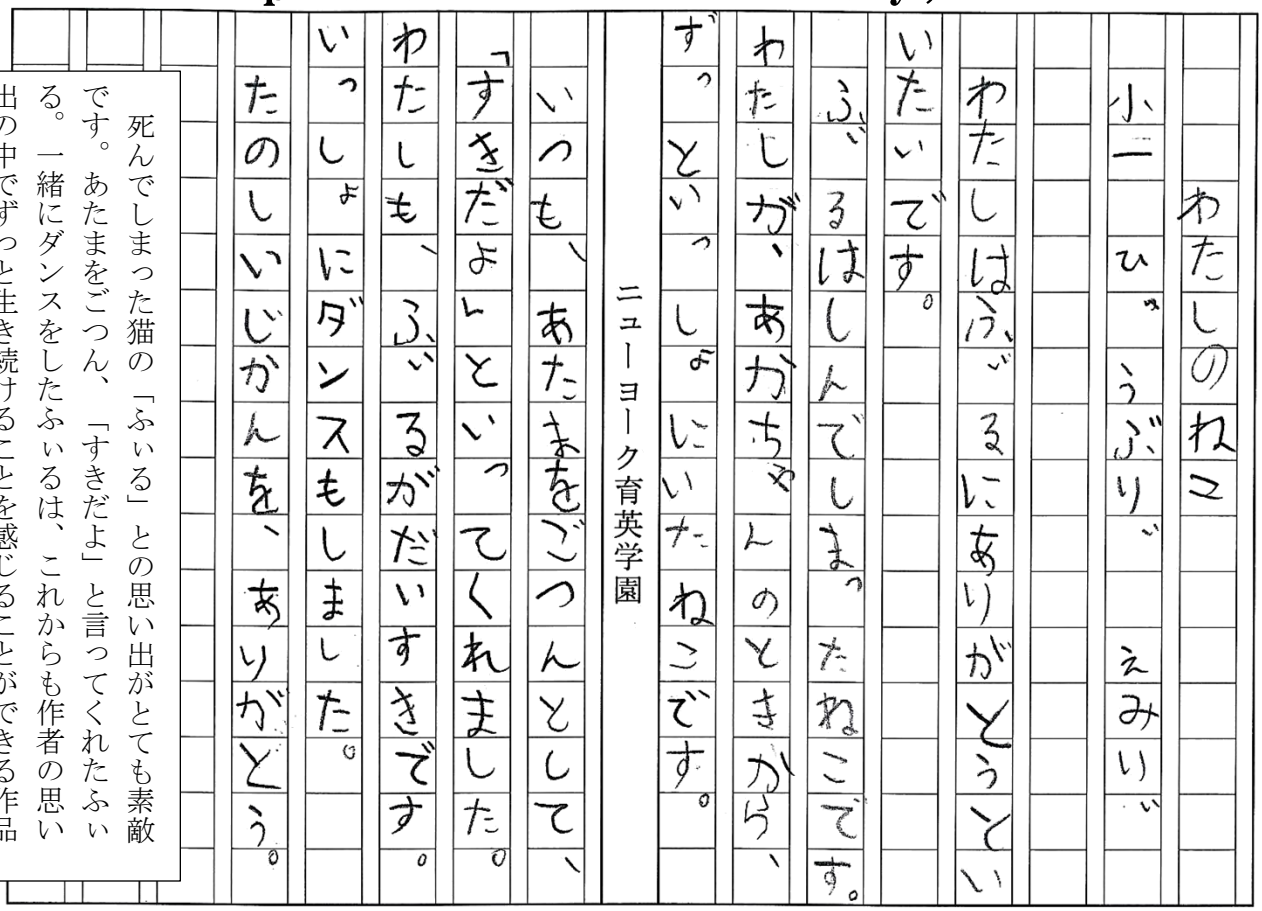
だからなのか、僕は、裕福ではないその少女の笑顔は穏やかで魅力的だった。

女や少女の家族を見て、かわいそう、とは思わなかった。果たして少女は、今の自分を不幸だと感じているだろうか。少女は僕にかわいそうだと思われるような存在ではなく、家族があり、仕事があり、充分ハッピーな訳であって、僕とは違う時間の流れの中に幸せを見出しているのだ。人の幸せとは、他人によって決められるべきものではないし、まして

ニューヨーク育英学園

特別賞

My Cat, Emily Hubley (1st grade)
Japanese Children's Society, NJ



わたしのねこ

小二　ひ　ふうり　えみりー

わたしは、ふうりがとういたいです。

ふうりはしんでしまったねこです。

わたしが、あかちゃんのときから、ずっといっしょにいたねこです。

ニューヨーク育英学園

いつも、あたまをごつんとして、「すきだよ」といってくれました。

わたしも、ふうりがだいすきです。

いっしょにダンスもしました。

たのしいじかんを、ありがとう。

死んでしまった猫の「ふぃる」との思い出がとても素敵です。あたまをごつん、「すきだよ」と言ってくれたふぃる。一緒にダンスをしたふぃるは、これからも作者の思い出の中でずっと生き続けることを感じることができる作品です。



や違う国に暮らす違う民族の幸せを、そこに住まない第三者が押しつけるものでは決してない。それは、僕の傲慢な考え方ではなかったか。少女は凛とした笑顔は、アンティグアでの生活が充分幸せであることの証かもしれない。そして、目の前に置かれたやるべきことに淡々と取り組んでいた少女の笑顔には、山積する課題から逃げたくなるに冷静さを取り戻させてくれる力が秘められていた。

ニューヨーク育英学園

新学期の多忙さの中で、毎晩ベッドにぐったり倒れ込む生活を送っている僕は、時間に追われ不平不満を漏らしているが、実際充分幸せなのかもしれない。幸せのカタチは共通ではないということに気付かせてくれた少女の笑顔に感謝である。

アンティグアで出会った少女の凛とした笑顔は作者に多くのことを投げかけます。垣間見る少女の生活と自分にとっての当たり前の生活の対比を進めながら「幸せ」とは何かを多方面から深く掘り下げることに成功しています。また丁寧な描写により、異国で作者が目にしたものが色鮮やかに伝わってきました。

I Couldn't Say It Though, Nana Furusawa (8th grade)
The Japanese School in Ho Chi Minh City, Viet Nam

特別賞

伝えられなかったけれども

中二　古澤　奈々

私は中学生になってからどれくらい「ありがとう」を伝えることができただろう。きっと百回も伝えられていないと思う。だいたいの場合が笑ったり、友達をばかにしたりしてふざけてその場をやりすごしているからだ。中学二年生にもなってありがとうをしっかり伝えられない私だからこそ、この作文にちゃんと「ありがとう」の気持ちをのせて届けたいと思う。

ニューヨーク育英学園

私が「ありがとう」を伝えたい人は十二年間育ててくれた母だ。

小学校の四年生の頃からほとんど毎日ケンカしかしていなかった。それでもいつも服は毎日キレイに洗って畳んであったし、御飯も作ってくれていたし、いつも学校に行くときは家のベランダから見下ろして手を振って待っていてくれた。

それなのに私はいつも自分が悪いとわかっていると思う。

ニューヨーク育英学園

ているのに泣きながら癇癪をおこしていた。

「ありがとう」なんて、物を買ってもらうときくらいしか言っていなかった。そうやって六年生になっても相もかわらず毎日のように癇癪をおこしていた。その日も朝からケンカして「こんな家出ていってやる！」そう叫びながら塾へ向かった。少し母の表情は悲しそうだったが、私はそんな表情をしている母を見て少し優越感を感じていた。

それでも意志の弱い私は塾が終わったあとにはまっすぐ家に帰った。

しかし、居たのは祖父で「母が倒れたから病院に向かう。今日が山だ。」と伝えられた。

私は一瞬、何が何だかよくわからなくなった。こんなケンカして家に帰ったら誰かが死にそうになる、なんてシチュエーションは、小説かマンガにしか存在しないと信じていたからだ。でも、それは日本の我が家で確実に起きていた。状況がいまいち把握できていない私は病院についてやっとわかった。朝まで

いつもと変わらず大声で怒鳴っていた母とは別人なのではないか、と思うくらい血の気が引いた母がベットで眠っていたからだ。

本当に私はどうしようもない大馬鹿だった。ただお年玉がいつもより少なかったくらいでケンカをして、家を出ていくとさわぎ、帰ってきたらまた母が家で待っていてくれていると信じていたのだから。

水葬前だって、これでもう母の顔は見れなくなるっていうのに意地を張って一言も発しなかった。

伝えたいことは山ほどあるのに、まだ一つも伝えられていない。どんなにケンカをしても温かい御飯を作ってくれたこと、六年間、一日も欠かさず私の登校姿をベランダから手をふりながら見送ってくれたこと、ケンカをしてもしても最後にはいつも抱いてくれたこと、夜、自分が寝る前に私の頭をなでてくれていたこと。

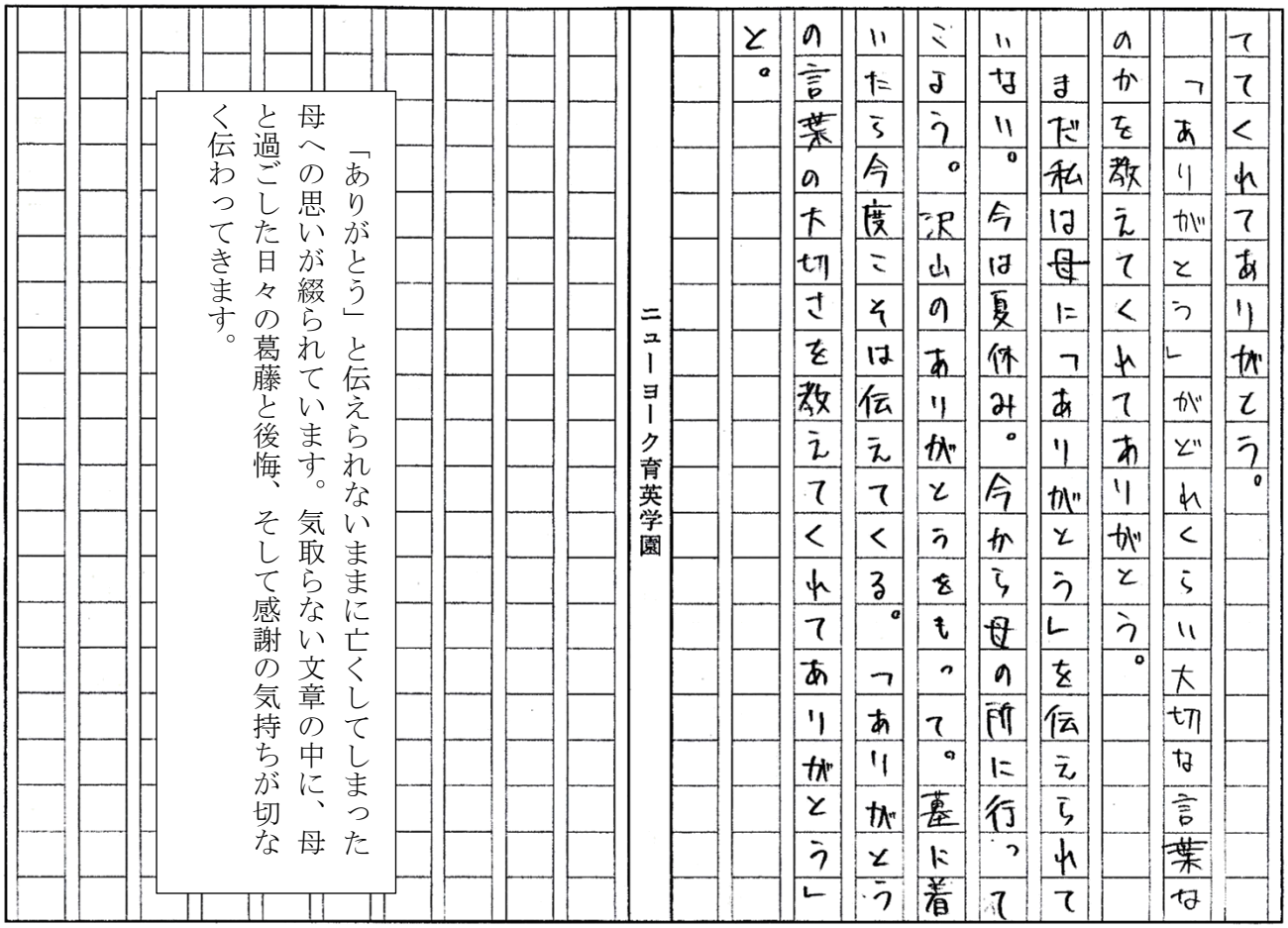
そして「ありがとう」を伝えることの大切さを教えてくれたこと。

母がそくなったことで感謝の気持ちを伝えられた私は、今は思ったときに真っすぐありがとうを伝えることが大切だと気づけた。

私はこれまで、ありがとうの気持ちを伝えるのは誕生日なんかの特別な日にプレゼントと一緒に送るものだと考えていた。だから何もないときに人に面と向かってありがとうというのは少し恥ずかしかった。けれど、それだと遅いときだってある。伝えたいときにスと伝えることが大切だったのだ。

それでも、中学生になってからの一年と数カ月でまだ面と向かってありがとう、といった回数はそんなにない。たった五文字だけど言われるとうれしくなるし伝えられないままだとツラくなる言葉。「ありがとう」。

お母さん、私と沢山ケンカしても御飯つくってくれてベランダから手振ってくれて、夜頭なでてくれてありがとう。悲しいときにいつも抱いてくれてありがとう。十二年間、育


てくれてありがとう。

「ありがとう」がどれくらい大切な言葉なのかを教えてくれてありがとう。

まだ私は母に「ありがとう」を伝えられていない。今は夏休み。今から母の所に行ってこよう。沢山のありがとうをもって。墓に着いたら今度こそは伝えてくる。「ありがとう」の言葉の大切さを教えてくれてありがとう」と。

ニューヨーク育英学園

「ありがとう」と伝えられないままに亡くしてしまった母への思いが綴られています。気取らない文章の中に、母と過ごした日々の葛藤と後悔、そして感謝の気持ちが切なく伝わってきます。